第１０章　拡大する教会における祈り③

祈りに対して素晴らしい答えをいただく

祈りに対して素晴らしい答えをいただく

神を信じ、切に祈るとき、人は光の中を歩んでいるのであり、その歩みには報いが与えられています。ローマ帝国の百人隊長コルネリオはそのような人物でした。彼はおそらく、当時のユダヤ人が「割礼は受けていないが共感的な」異邦人、すなわち、おそらくは部分的改宗者と考えていたような人物でした。彼は、異邦人であったにもかかわらず、「ユダヤの全国民に評判の良い人」（使徒 10:22）でした。また、既にイエスのことを聞いており、その死と復活、昇天に加え、聖霊のバプテスマについても知っていたことは明らかです（使徒 10:36-38 参照)。これは、神を求めたいという彼の思いをかき立てたことでしょう。当時、異邦人は自分たちと同じようには神に近づけないというのがユダヤ人の考えでした。しかし、ペテロがすぐに学ぶところとなるように、神にはえこひいきはないのです（使徒 10:34)。

> さて、カイザリヤにコルネリオという人がいて、イタリヤ隊という部隊の百人隊長であった。彼は敬虔な人で、全家族とともに神を恐れかしこみ、ユダヤの人々に多くの施しをなし、いつも神に祈りをしていたが、ある日の午後三時ごろ、幻の中で、はっきりと神の御使いを見た。御使いは彼のところに来て、「コルネリオ」と呼んだ。彼は、御使いを見つめていると、恐ろしくなって、「主よ。何でしょうか」と答えた。すると御使いはこう言った。「あなたの祈りと施しは神の前に立ち上って、覚えられています。さあ今、ヨッパに人をやって、シモンという人を招きなさい。彼の名はペテロとも呼ばれています。この人は皮なめしのシモンという人の家に泊まっていますが、その家は海べにあります。」（使徒 10:1-6）

この異邦人の人柄は素晴らしいものでした。①彼は敬虔な人で、神をあがめる人、人格的にも素晴らしい人でした。②神を恐れる人で、まことの神を信じているばかりでなく、神を喜ばせたい、持っておられるものは何でもいただきたいと思っていました。③家の者たちのことも気にかけており、神についての知識を分かち合ってい

ました。④貧しい人々にも気前のいい人でした。⑤神に絶えず祈っていました。

聖書を見る限り、コルネリオが自分の祈りにどのようなことを含めていたかについてはわかりません。しかし、実際に起こった事からその祈りの内容を想像することはできます。彼のもとを訪れた天使の「シモンという人を招きなさい」（使徒 10:5）という言葉にその手がかりがあります。ここから、コルネリオが、何をすべきか指示してくれる誰かを送ってくださいと心の底から祈っていたに違いないと考えることができるのです。それまで聖霊に満たされていた人はみなユダヤ人であったことから、コルネリオも、実際のところは、約束された救いと聖霊の満たしをいただきたいと願うがゆえに、ユダヤ教に完全に改宗してしまいたいとすら祈っていたかもしれません。

コルネリオは自らの受けた光の中を歩んでいましたが、正直で真摯な人ならそう感じるように、その魂においては、神が自分と家の者たちのためにさらに何かを備えてくださっていると感じていたように思われます。その心の中にあったのは、神をさらに素晴らしい形で体験することへの飢え渇きであり、求道心でした。「神を恐れる人」として、彼はおそらく、主の大いなる約束についてのエレミヤの宣言を耳にしていたことでしょう。**「もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう」（エレミヤ 29:13）**。いずれにせよ、彼はほどなくその成就を、「義に飢え渇く者は幸いです。その人たちは満ち足りるから」（マタイ 5:6）という、それを裏づけるイエスの教えの成就とともに、知るところとなるのでした。

> この普遍的な暗闇の時代、一つの喜ばしい閃光が現れる。保守的キリスト教の中に一群の人々が見つかり、その数は増え続ける。その宗教的な歩みは神ご自身を求めるいっそうの飢え乾きが特徴である。霊的なリアリティを切に求め、言葉によって退けられることはない。…彼らは神に飢え渇き、生ける水の泉の深いところからその水を飲むまで、満足することはないのである。

コルネリオは、どちらかと言えば驚くべき形で祈りの答えをいただきました。それは神の御使い（使徒 10:3）と人であるペテロ（使徒 10:5-6）の両方を巻き込んだものとなりました。祈りの答えがもたらされるにあたっての御使いの働きは本書の第 14 章で考察していますが、ここではさしあたり、誠実に求める人に適切な答えを与えるためには、神は必要な手段は何でも採用される、ということのみ記しておきましょう。

祈りの答えは、時としてゆっくりと訪れます。というのも、答えに際して神が選ばれる方法は、御声に応答してそこからいくつかの教訓を学んでいかなければならない人を、巻き込むものだからです。神がコルネリオの祈りに答えることができる前に、ペテロは整えられた使者とならなければなりませんでした（これだけでも、大規模な一大プロジェクトでした）。神は祈るクリスチャンに答えてくださいますが、その答えをもたらすのに、別の祈るクリスチャンを用いられることが頻繁にあるのです。その結果、「その翌日、この人たち［著者注：コルネリオ遣わした人々］が旅を続けて、町の近くまで来たころ、ペテロは祈りをするために屋上に上った」（使徒 10:9）ということが起こります。ペテロがこの時間帯に祈っていたことに、特に理由は与えられていません（ユダヤ人にとっては朝、午後、夕暮れが定められた祈りの時でした）。おそらく、習慣であったのと、神と個人的な交わりを持ちたいという願いからそうしたのでしょう。私たちが祈る時にも、神に語っていただける機会を差し上げますし、そもそも聞きたいと願うものです。ペテロの祈りは突如として、自らと教会全体に測り知れないほどの意味を持つ啓示を引き起こすものとなりました。神はえこひいきの無い方であり、ユダヤ人世界と同様、異邦人世

界もまた、福音によって祝福したいと考えておられたのです（使徒 10:34-35 参照）。

私たちの祈りによって左右されるものを測ることはできません。しかし、もしもコルネリオが祈っていなかったら、異邦人への扉は、その後もしばらくは閉じたままであったことでしょう。もちろん、神の祝福の約束は常に、地上のあらゆる民族に対するものであり（創世記 12:3,18:18,22:18,26:4,28:14、ガラテヤ 3:8 参照）、その扉が永遠に閉じられたままでなかったことは確かです。一方、ペテロが祈っていなかったとしても、同様の遅れが起こっていたことでしょう。少なくとも、神がご自分の指示に従う他のクリスチャンを見つけられるまではそうであったことでしょう。しかし、コルネリオが祈り、ペテロが祈り、その素晴らしい結果として、ペテロは異邦人の世界にその扉を開けて入り、コルネリオと彼の家の人々は、福音が初めて自分たちに語られるその間にも（福音についてはこれ以前にも既に知っていました。使徒 10:36-37,44-48）聖霊の満たしを体験するところとなったのです。

祈りについてのこの箇所からは、いくつかの教訓が学べます。神は敬虔なデボーションを目に留めてくださり、正しい人々の祈りに答えをもたらす種々の力を働かせてくださいます。たゆまぬ祈りの歩みと神との交わりとは、特別な導きと指示がいただける扉を開くものとなるのです。地位の高さや無名さに関係なく、人は求めるならば神を見出します。ただし、祈る時には忍耐が必要です。なぜなら、私たちの願いに答えるに際し、神はしばしば他の人々を用いられるのであり、彼らの内にあって、また彼らを通して働かれるのが常だからです。祈りは、人々の歩みに影響力を及ぼすべく用いることのできる最高の力なのであり、究極的には歴史にも影響を与えるものなのです。